日本教育情報学会　　第38回年会　　令和４年８月２１日（日）　　オンライン発表

教育映画の視聴効果の調査研究
―持永只仁の人形映画上映を通して―

角　和博　　佐賀大学
古川 美樹　　武雄市立北方小学校
本村 猛能　　日本工業大学

１. 研究の背景

戦後の日本では、戦中の教育内容を払拭する意図やGHQの奨励もあり、また戦前・戦中に劇映画などに関わっていた映画人が参加し、教育映画が盛んに製作された。

現在は、なぜ教育映画が注目されないのだろうかという素朴な疑問が湧きおこった。ICT教育の時代であり、教育映画の教育的意義はなくなったのであろうか。

２. 研究目的

教育映画、視聴覚教育、ICT教育と現在まで続く教育の意義と役割について、本研究では、出発点ともいえる教育映画の児童に与えた教育効果について児童の感想文をもとに検討する。

３. 教育映画の意義

昭和33年1月14日（火）第448号　時事通信週刊グラフ教室
指導の手引き　人形映画　指導の留意点
文部省初等中等教育局初等教育課　大内茂男

子どもたちの中には、人形映画や漫画映画を喜びながらも、これを有名な俳優の出る劇映画よりも数等劣ったものと見なしている子供もいるようである。これほど誤った考えはない。人形映画はスムーズな動きを表すために、まず生きた人間や動物を映画に撮って、そのフィルムの１コマ１コマを分析する仕事さえやる。その製作の労苦たるや、とうてい劇映画の比ではない。それがジャンルの違いであり、この新しい分野を開拓するためにたえず創造的な努力の行われていることを特に認識させたい。

・人形映画は劇映画よりも劣っていない。
・制作過程では実写フィルムの１コマ１コマを分析することもある。
・制作の大変さは実写映画とは比べようもない。
・実写映画とはジャンルが異なる。
・創造的な努力が行われいることを子どもたちに理解させたい。

４. 戦前･戦後の持永只仁の足跡

1942－1945
　芸術映画社で瀬尾光世のもとで「アリちゃん」や「桃太郎の海鷲」などのセル画のアニメーション映画を制作。

1945.3　満州映画協会に移動。

1945－1953
　戦後の8年間で中国の映画制作関係者にアニメーション映画や人形アニメーション映画の制作技術を伝えた。

1953　帰国
　この時期は教育映画の制作が盛んに行われおり、また新しくテレビのCM制作が始まりつつあった。アニメーションや人形アニメーション制作は短編であれば製作費も抑えられて、教材やCM制作に向いていたといえる。

1956－1959
　人形映画製作所を設立して「瓜子姫とあまんじゃく」を制作した。その後1959年までに9本の文部省選定の教育映画として人形アニメーション映画を制作した。

5.「こぶとり」のあらすじ

持永の作品はどれも原作と異なる展開である。たとえば「こぶとり」(1958年，21分）のあらすじは、民話の内容と意地悪爺さんが頑固な爺さんで、人の好い爺さんは瘤が２つになった頑固な爺さんを最後に助けて鬼に瘤をとってもらう展開になっている。持永作品では、人間のもつ素直さ、正直さ、優しさが基調となっていることが特徴である。

6. 児童の感想結果

学映画会に参加した105人の児童へのアンケート調査の中に「こぶとり」のどこが面白かったなどを聞く項目があり、それを６項目にまとめてグラフ化したものが図1である。

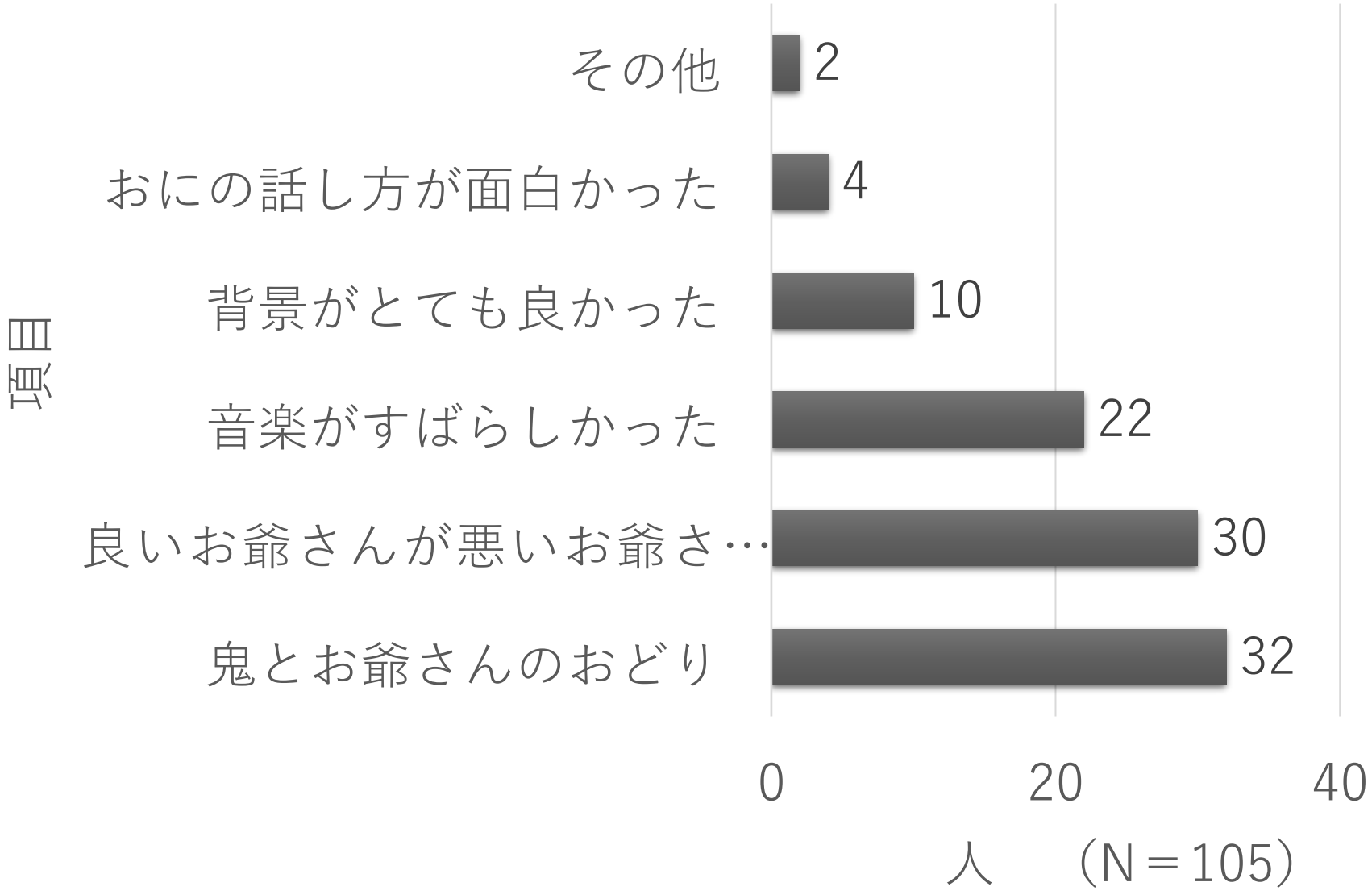


図１　映画のどこが面白かったですか。

鬼とお爺さんが躍るとことや良いお爺さんか悪いお爺さんを助けるところなどの原作から改変した持永の演出場面の印象に残っていることが分かる。持永が演出した人間のもつ素直さ、正直さ、優しさなどが児童に届いていることが分かる。また別の調査結果では「ちびくろさんぼ」「ふしぎなたいこ」と比べて「こぶとり」が圧倒的に人気が高かった。

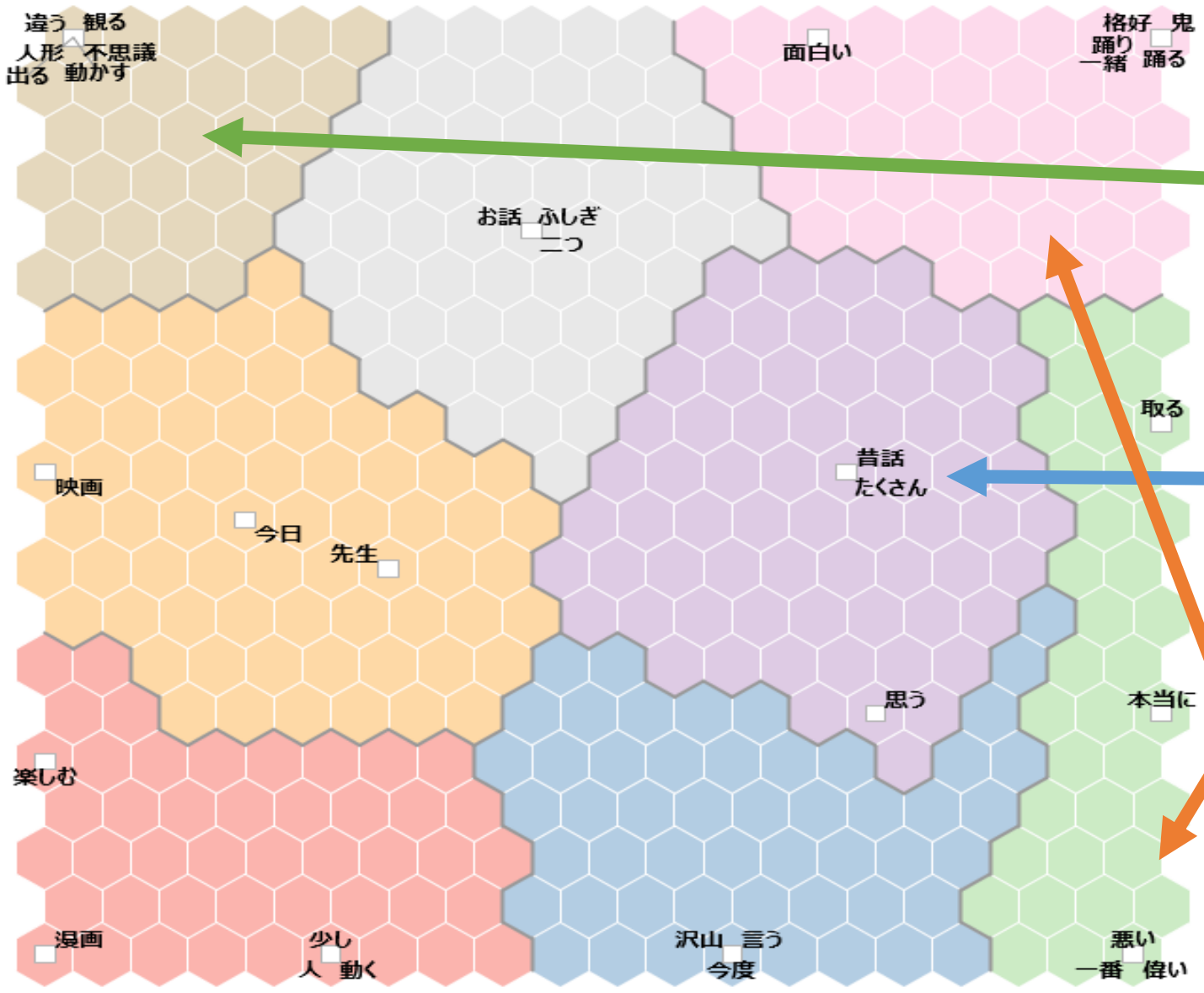
６．児童の感想文

6年のH.Yさんは、「今日の映画会について」という次のような感想文を書いている。

今日先生が映画をやってくれました。どんな映画かとたのしみにしていたら、みんなまんがでとてもおもしいと思いました。やった映画は二つで、「こぶとり」と「ふしぎなたいこ」でしたが、私はこぶとりじいさんのお話のほうがよけいおもしろかった。おじいさんは、おにに、こぶをとってもらいますが、その時の、おにのおどりやかっこうが、とてもおもしろく私もいっしょにおどりたくなるようでした。

　またいちばんおしまいに悪いおじいさんのこぶもとってもらってあげてほんとうにえらいと思いました。この映画は、このあいだみたまんがとちがって、お人形さんが出てきますが、どうやってうごかすのかふしぎです。すこしうごきかたがおかしいけど、このあいだのまんがよりほんとうに人がやっているみたいでいいなと思いました。またこんど先生がやってくれるといいましたが、こんどはもっとたくさんやってもらいたいと思います。そしてこぶとりみたいに昔話がたくさんあるとよいと思います。

7. 感想文の分析



6年のH.Yさんの感想文をSOMで表示した。図から持永作品の特徴である人形のコマ撮りを初めて鑑賞した感想(左側のクラスター)

もっと鑑賞したいという要望(中央のクラスター)

鑑賞した2作品の内容面での評価(右側のクラスター)

SOMの領域として整理されていることから、この児童が持永作品を評価したことが分かる。

8. 考察とまとめ

昭和30年（1955）代は、徐々にテレビが一般家庭に広まりはじめる時代であり、教育映画の上映は全国の小中学校で急速に広まった。

戦後の混乱期では子どもたちの教育は、これからの社会を立て直すための大きな役割を担っていた。

持永作品では、人間のもつ素直さ、正直さ、優しさが基調となっていることが、105人からのアンケート調査からも分かったが、一人の児童の感想文からも読み取れる。

人形映画は、子どもたちに人としての素直さ、優しさ、思いやり、その教育的な意義が大きいと思われる。

教育映画の中で人形映画は、戦後の日本の教育において道徳心やモラルを守るというような社会的態度を形成することに役立った。

ご清聴有難うございました。